

七回忌 茶の花朗読会

日時 1月13日(休)、13時～15時30分

場所 慈眼寺(入間川1丁目)

内容 吉野弘の詩にかけた思いと生涯を朗読と映像で振り返る

定員 80名

申込み 12月18日(水)から中央公民館へ ☎2952-2230

詩人吉野弘展と茶の花講演会

展示 2月11日(祝)～15日(土)、9時～17時

場所 中央公民館

内容 吉野弘氏の図書や資料の展示

講演会 2月15日(土)、14時～15時30分

内容 元中央図書館司書・石川友子氏が語る「私の見た吉野先生」

定員 70名

申込み 12月18日(水)から中央公民館へ ☎2952-2230



吉野さん直筆の祝婚歌を載せた「婚姻記念証」をお贈りしています。市民課では、狭山市に婚姻届を提出された方に、「婚姻記念証」をお贈りしています。広報さやまの「残しておきたい狭山の風景」などでおなじみの池原昭治さんが描いた童絵に、吉野弘さん直筆の「祝婚歌」を載せ、裏面には提出された婚姻届を複写することで、特別な日を記念する品となっています。



この茶畑が吉野さんとの出会いの場。当時は家も少なく、富士山や秩父の山まで見渡せました

野さんのお話、吉野さんの詩や影響を及ぼすことはなかつた。でも、吉野さんの植物に対する見方も、詩にも影響を及ぼすことはなかつた。でも、吉野さんの植物に対する見方も、詩にも影響を及ぼすことはなかつた。でも、吉野さんの植物に対する見方も、詩にも影響を及ぼすことはなかつた。

昭和48年の北入曾の中原地区は新興住宅地で、広大な畑の中はあちこちに家が建ち始めている頃で、遠くに富士山、常泉寺の櫓、特産の根菜類の畑や茶畑が広がっていました。その年の春、この地に越して来て半年ほどの一人のおじさんと、土埃にまみれて黙々と茶の取り木作業をしていた青年の出会いがありました。茶の取り木作業は50アールの畑に家族四人で一週間も費やす指先の繊細な作業で、見たことのない異様な光景に、「何をしてるのですか」と畑の中に入り込んで始まった植物談義は尽きることなく、連日のように続きました。吉野さんは、農業科の専門科目である作物、野菜、畜産、茶、土、肥料など、自身が学んだ

吉野さんにとって衝撃だったのは、茶の花おぼえがきにも書かれている、成熟成長後に生殖成長ともいって話したが、言葉で間違っていたのかもしれないと思いましたが、もしこの言葉がなかったら、吉野さんと私の縁も、吉野さんの植物に対する見方も、詩にも影響を及ぼすことはなかつた。でも、吉野さんの植物に対する見方も、詩にも影響を及ぼすことはなかつた。

来年1月15日には、詩人吉野弘の七回忌を迎えます。これに合わせ、朗読会や講演会も開催されます。また、4月には入曾地区の地域交流施設に吉野弘さんの作品などを展示するコーナーが生まれると聞いています。これからも、吉野弘さんを慕う皆さんのよりどころとして、公民館、図書館とも連携を持って顕彰してまいります。



吉野さんの眠る慈眼寺の墓所には、自身の詩「草」が刻まれています。慈眼寺：入間川1-9-37

問合せ広報課へ内線7161

吉野さんとの出会いは茶畑だった さやま吉野弘の会・仲川幸成さん

商業科にはない科目の虜になつたように、前日の話が解らないと繰り返すうちに、この時のやり取りが『井戸端園の若旦那』で、或る日、私に話してくれました。『で始まる散文詩「茶の花おぼえがき」になりました。そして、この詩が収められている詩集「北入曾」を渡された時から、文字どおり詩人吉野弘と井戸端園の若旦那の間柄となりました。昭和52年1月のことでした。



第四詩集「北入曾」を手に吉野さんの思い出を話す久保田さん

狭山市周辺は様々な自然を楽しむ場所が多く、西武池袋線で飯能や秩父にも家族でよく出かけました。自宅のある入曾からは飯能市や日高市がほど近く、そこに点在する地名が朝鮮の言葉に由来して

かれた、大きな机だけが父の書斎スペースでしたが、狭山に越してからは戸建ての住宅に父の書斎もでき、大量の蔵書を並べられる大きな書棚も設えました。やっと父は、じつくりと詩作活動に専念できる環境を得ることができたと言えそうです。

狭山市は全く縁のない土地でしたが、私たち家族全員狭山の環境にとても満足しました。特に父は家の周辺にある巨大な榎、身近に広がる茶畑、七曲井や堀兼之井など長い歴史を経てきた史跡にもとても興味を示しました。

家の西側に広がる茶畑で作業をする井戸端園茶園の若旦那・仲川幸成氏との交流から、父は植物の生態のメカニズムについてたくさん知識を得て、のめりこんでいきま

した。それまで漠然と眺めていた植物を、もっと深く観察し生態の不思議さに惹かれるようになったのだと思います。板橋に住んでいた頃の詩は、生活の中から生まれる詩が多かったのですが、狭山に住んで5年目の昭和52年に上梓した詩集「北入曾」以降は、出す詩集ごとに植物をテーマにしたものが増えていきました。

父の詩の根幹には、出身地である山形県酒田市で体験した「生と死」があります。13歳の時の実母との死別、病や戦争体験など自身が二度も命拾った経験から、20代半ばで「これから自分は生きなければならぬ」と感じ、その思いを生涯強く持ち続けました。狭山で感じ取った自然を詩にするときも、詩の中には「生きる」という人間の幸福と辛さを読み手に感じさせるものが多いと思います。

狭山市周辺は様々な自然を楽しむ場所が多く、西武池袋線で飯能や秩父にも家族でよく出かけました。自宅のある入曾からは飯能市や日高市がほど近く、そこに点在する地名が朝鮮の言葉に由来して



吉野さんの長女・久保田さんのお店(シュエット)には、吉野さんの作品や直筆のスケッチなどが多数展示されています。シュエット：本庄市北堀 1637-1

狭山市には35年間住みましたが、父は本当に狭山市を愛し、その中で自分の詩作活動が熟成していくのを感じていたはずですが、会社を辞めたばかりの頃は「雑文業」と称し、「文筆業」と表記することにためらいを持っていたようですが、狭山に住み、やっと「文筆業を自負し、自分の若い時に夢見ていた詩人として生きる」と言えるようになったのだと思います。

狭山に引越した5年後、父にとつての記念すべき第四詩集のタイトルが「北入曾」だったことには、家族も驚きとともに妙に納得し、その命名には地元に対する父の深い思いを感じ取りました。

いるという説に父はとても興味を抱き、そこから韓国語への関心が深まり、それを題材にした詩が生まれました。

吉野さんの作品と所縁の地

